

19 世紀末における「外見」の発見

—「東京百美人展」の写真に着目して—

日本女子大学 木村絵里子

1. 目的

本報告の目的は、19 世紀末における女性の写真を「見る」という経験の時代的文脈について考察することである。写真技術の普及期では、多くの場合、自分自身の写真を「撮る」ことよりも先に、別の誰かが写る写真を「見る」ものとして経験された。この写真受容の様式とは、自然でも人為的なものでもなく、ある社会に固有のやり方で作り上げられ、定型化されていく。日本社会の場合、人物写真に先行するメディアとして位置づけられるのは浮世絵であるが、いうまでもなく、これらの間には明らかな抽象度の違いがある。つまり、日本における写真という新しい視覚メディアとの対峙は、たとえば肖像画の長い歴史を持つヨーロッパとはまた異なる独自の経験であったと考えられるのである。本報告では、この写真を「見る」ことの社会的様式から、とくに女性に対する視線のあり方を考察することをねらいとしたい。

2. 方法

本報告で着目するのは、1891(明治 24)年に浅草・凌雲閣において開催された「東京百美人」という写真の展示会(以下、東京百美人展)である。東京百美人展では、百名もの芸妓の写真が一堂に集められ、登閣客による人気投票が行われた。このことから日本で最初の「ミス(美人)コンテスト」であるといわれている。一方、その被写体が芸妓に限定されていたことに対しては、もともと芸妓が「見られる」商売であったから他の女性よりも早く写真というメディアに接するようになったとの説明がなされてきた。だが、このような見方は、女性と「美」の関係における現代的な感覚をもちこんでいるのであり、写真とその受容様式についてももう少し注意深く検討しなければならない。

そこで本報告では、この東京百美人展の写真と、明治期以降、「美人画」として括られた江戸期の浮世絵を比較しながら、両者における「美人」の意味的差異について考察する。またそのさい、東京百美人展の被写体が「芸妓」という職業の女性であることの特異性についても考慮に入れる必要がある。

3. 結果

芸妓の「見た目」のみを評価するということは、東京百美人展という場において、花柳界という疑似親密空間のなかで生産・消費された多様で包括的な評価(たとえば芸妓評判記に書かれた評価)がそぎ落とされ、写真というメディアによってイメージとして切り取られたとき、はじめて可能になる。東京百美人展を契機として「美人写真」というジャンルが生まれたが、それは「美人画」における見方を倒錯しながら成立しているのである。

紙幅の都合上、詳細は省くが、この新しい「美人」の見方とは、実にいくつかの偶然が重なって生じたものであった。ゆえにその見方は、このときにすぐ確定されたわけではなく、その揺らぎが「美人論」の系譜とでもいべきものを展開させた。ここで注目すべきは、はからずも「外見」というものが自律した形において出現し、それと同時に外側からは容易に読み取りえないものとしての「内面」が浮上したということである。

文献

佐久間りか、1995、「写真と女性——新しい視覚メディアの登場と『見る／見られる』自分の出現」奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考V 聞き合う女と男—近代』藤原書店:187-237。